

平成24年6月5日（火）

平成24年度

北地区児童生徒支援ネットワーク



稚内市立稚内中学校は、平成19年度に創立60周年を迎えた。この記念すべき年を「飛躍の年」に位置づけ、その活動のひとつとして、『稚内中学校生徒支援ネットワーク』（略称：稚中生徒支援ネットワーク）が結成された。

平成22年度には、呼称も『北地区児童生徒支援ネットワーク』と改め、中央小学校とより連携を強め、活動を充実・発展させてきた。

24年度も学校の生徒指導体制の支援・充実はもちろんのこと、家庭・学校・地域の連携を益々強め、子ども一人ひとりが輝く北地区をめざして「連携力」を発揮していきたい。

（このマークは手塚治虫さんが稚内市に寄贈してくれたもので「子育て運動」のシンボルとなっているものです）

北地区児童生徒支援ネットワーク運営会議

1. 23年度活動の概要と成果

支援ネットも結成5年が経過した。「稚中生徒支援ネットワーク」から「北地区児童生徒支援ネットワーク」へと発展して2年目の23年度は、中央小学校との連携がより強まり、北地区の子ども全体を視野に入れた支援活動が続けられてきた。月一度の運営会議の開催と情報交換、学び合い、学校や家庭に対する支援が主な活動だった。23年度の特徴は、関係機関との連携が進んだことにある。昨年度に引き続き、「北地区民生児童委員協議会児童生徒ケース会議」など、地域に広がる手厚い支援体制が継続された。また、情報交換や事例に対する意見交換、学び合いが有効に作用し、具体的な支援体制が機敏に取られるなど、着実に成果を上げてきた。その特徴点をひとことでいうと、きめの細かい情報連携から具体的な行動連携が生まれたことである。主な活動の成果は、以下の点にまとめられる。

- ①ネットワーク会議による情報共有と委員による具体的支援策の取り組みが生まれ、支援体制や活動が有効に作用した。
- ②教育相談所・関係機関など幅広いネットワーク活動との連携により、相談体制や具体的・個別的支援が充実した。
- ③小中の連携だけではなく、幼・保・小の連携が進むなど、北地区の子どもを見守り、支援する体制が充実した。
- ④民生児童委員協議会との連携など北地区における見守りの輪が広がり、強まった。
- ⑤適応指導教室や教育相談所との連携や支援により、不登校支援・親支援に取り組み、成果を上げた。
- ⑥善養寺先生の研修会を通し、カウンセリング研修の重要性と必要性を学んだ。
- ⑦委員同士の交流が深まり、心合わせがより強まった。

2. 「課題を持つ子」「困っている親」への支援について

- 就学援助家庭・単親家庭が、他地域と比べて多い。家庭や離婚・再婚など夫婦間の問題が子どもに影響を与えている。対応し、ケアもしているが深刻な課題である。
- 母親は、夜も昼もかけもちで仕事している。具合が悪くても「病院へいけるはずないしょ」という子がいる。親も子どもたちも大変な中で生活している。
- 内科検診で、やせすぎ、低身長ということが指摘され、病院でみてもらうようにいわれた。民生児童委員さんのとの連携とお世話のおかげで前進した。スピード感のある支援体制に感謝したい。
- 「ケータイ」依存の子、人間関係のトラブルから自傷行為に走る子がいる。感情をコントロールできず精神的に不安定になるなど家庭とも連携した支援が必要。
- 学校全体でサポート体制を作っていく。課題を抱えている家庭、子どものサインを見逃さないことが必要。家庭と懇談を丁寧に進める。民生児童委員等支援できる人を紹介す

ることにより、問題解決に向かう。

- 小学校は不登校がゼロに、支援が有効に働いている。中学校は1名、つばさ学級やネットワーク委員のとも連携し、本人・お母さんも勇気づけられている。
- 電気が止められ、経済的に大変な状況にあることがわかり、一時保護、親支援など関係者の機敏な支援が有効に機能した。

3. 例会で学んできたこと

- 本当に困っている人は、なかなか助けてほしいと言えない。こちらからコンタクトを取る。足を運ぶことが大事。そして話を聞いてあげる。安心して相談できる関係や体制をつくっていくことが大事。学校はアンテナを高くし、他との連携を機敏にとることが求められる。また、担任まかせ、あるいは学校だけで孤軍奮闘では問題は解決しない。
- ネットワークが情報連携から具体的な行動連携に踏み出した。これは最大の財産だ。1つ1つのケースに対応した生きた支援活動の教訓をみんなで大事にしていきたい。
- 家庭が不安定。食べて、寝て、安心して学校へ送り出す、そんな家庭の役割が機能していない。片親ということ、二人分頑張らなければいけない家庭も多い。学校、地域が一体になって子どもをみていく必要がある。ネットワークの活動は大変大事だ。子ども達がみんなに見守られている、それが伝わってくる。先生や親の頑張りが伝わる。子どもの頑張りが先生や親に伝わり、そのことでまた子どもが頑張る。頑張っていれば、誰かがみている。励ましの良いサイクルになっている。
- 不登校の全市的状況だが、数値から見ると、小は0、中は4、パーセントでいうと0.2%くらい。全国状況は、都市部で3%くらいの数が不登校。奈良県は、別室登校が3%。それからみるとかなり健闘している。親、学校、関係者の取組が素晴らしい。何が、全国と違うのか。学校・地域・関係団体のネットワークが深まり、どの地区でも民生児童委員の活動と学校の活動との深まりが年々進んでいる。北地区では、民生児童委員のサポート体制が生まれている。
- 情報管理とネットワークの体制、内閣府の見解は、教育にかかわる必要なネットワークにおいて、必要最小減にとどめ情報の提供を認める。サポートのために最小減必要な、写真や住所については可ということだ。情報をもらさない管理が大切だ。
- 子どもの生活に心を寄せ、教師の専門性から困難と貧困から救うという教師の力量が求められている。稚内はこの貧困が多い。大変な苦しみの中で生活している親や子どもがいる。親の我が子へ寄せる愛情を知り、心をよせる。そういう視点で見ることのできる教師がいる。それが稚内の誇りだ。
- 関係者のネットワークが繋がっていく。9年間みんなで育てようということだ。学校も地域も考え方を一貫して育てよう。子育て運動が基盤になり、みんなで一緒に育てる。小中一貫は地域育ちの過程でもある。
- 今後、個別のケースだけではなく、今子ども達やそれを取り巻く生活に何が起きているかを広くつかみ、考えていく必要がある。

4. 平成24年度もきめ細かなネットワークで支援を

困った子・困った親は、困っている子・困っている親である。支援によって子どもは自立の道を歩むようになる。親も支援を求めている。生徒支援とともに親支援に取り組むことで、課題が解決される。これは支援ネットの活動教訓である。

平成24年度も、子どもの抱える問題点を早期に把握し、適切な支援体制を取っていきたい。それには引き続きネットワーク機能を強めていく必要がある。必要に応じ、情報連携から行動連携が生まれるようにしたい。また、小中の連携・一貫が強められている中で、一層北地区ぐるみの支援活動を充実させていきたいと考える。北地区ぐるみの子育てを充実させていくには、PTAへの参加率の向上、活動の充実がカギになる。支援ネットがその支えとなるよう今年度も力合わせをお願いしたい。具体的には以下の活動を進めたい。

- ① 効果的で、相互激励の生まれる親支援の推進
- ② 人権尊重に裏打ちされた情報の開示とプライバシーの保持、有効な支援活動の創造
- ③ 学習意欲を高める学習支援活動の推進
- ④ 一人ひとりの児童・生徒に応じたサポート活動の展開
- ⑤ 「カウンセリング」研修の推進
- ⑥ 機敏で効果的な網の目の行動連携を

運営会議日程(案)

番号	月 日(曜日)	開始時刻	場 所	備 考
1.	6月 5日(火)	14:00	飛躍の教室	体制の確認
2.	7月 2日(月)	14:00	飛躍の教室	サポート活動の検討
3.	8月 6日(月)	14:00	飛躍の教室	サポート活動の検討
4.	9月 4日(火)	14:00	飛躍の教室	サポート活動の検討
5.	10月 1日(月)	14:00	飛躍の教室	サポート活動の検討
6.	11月 5日(月)	14:00	飛躍の教室	サポート活動の検討
7.	12月 3日(月)	14:00	飛躍の教室	活動のまとめ

- 1月から3月にかけては、一年間の活動を見つめ合い記録化する努力をします。